251 骨シンチグラム上での肋骨異常集積の検討

都立駒込病院 放射線科 弥富晃一
都立大久保病院 放射線科 木下文雄

最近シンチカメラの進歩，放射性医薬品の改良が目覚ましく、特に、骨転移の検出は、X線写真より骨シンチグラムの方が早期に診断出来るようになり検査の希望が激増した。多くの症例を検討してみて、肋骨に見られる異常所見は、必ずしも、癌の転移ではない事が分かり、肋骨に見られた異常集積について追跡検討して見た。

昭和53年4月1日から昭和54年5月31日までの1年2ケ月の間に、当科では、614件の骨シンチグラムを行つた。この中で異常集積を指摘したものは306件であり、脊椎など他の部位にも異常所見があつた例を除いて、肋骨にのみ異常を認めた例は49例であつた。

当院では、乳癌例の骨シンチグラムの希望が多く、全体のほぼ58％が乳癌の症例であり、この為、肋骨にのみ異常集積を認めた例でも49例中30例が乳癌の術前、又は術后の例であつた。

49例中16例は癌の転移又は全身骨転移の前徴であつたが、20例は試験切除で骨折とされたもの、又は異常集積が次第に消失していつたものであり、骨折と考えられた。残り13例は、現在経過を観察中のもの、又は結果が不明のものである。

疾病別で見ると肺癌例は10例中8例までが癌の転移、又は癌の浸潤であり、肺癌の場合は、例え肋骨に1ケの異常集積を見ても、癌の浸潤、又は骨転移が考えられた。

これに反して、症例の多かつた術后乳癌の経過中の肋骨異常集積では、30例中4例のみが癌の転移であり、骨折例は18例であつた。この18例中8例は術直后に肋骨に異常集積が出現し経過を追うと次第に消失していつた例で、手術中に何らかの外力が肋骨に加わつたものと思われた。

この他の10例の骨折例は、最初、異常所見がなく経過観察中に肋骨に異常集積が出現し試験切除を行つたら骨折であつた例が2例、その他次第に異常集積が消えていつた例が8例あり、胸部打撲などの理由がはつきりしているものは10例中5例であつた。

以上、我々は骨シンチグラム614例中肋骨のみ異常集積を認めた49例について、癌の転移の有無、骨折の可能性を検討した結果

1．2～3個縦に並んだ異常集積は、骨折と考えられる。
2．原疾患が肺癌の場合は、転移、又は癌の浸潤が考えられる。
3．原疾患が乳癌の場合は、孤立した異常集積は骨折の可能性が高い。

252 骨シンチグラム像―悪性腫瘍患者の骨シンチでみられる下肢骨異常集積像の検討―

横浜市立大学 放射線科
小野 慈，朝倉浩一，小田切邦雄，中島康雄，松井謙吾
神奈川県立成人病センター 放射線科
田中利彦，山本洋一，中村 豊

目的：悪性腫瘍患者の骨シンチ読影の際，四肢骨の異常集積像が骨転移によるものか，良性の骨病変によるものか判断が要求される。X線像にて比較的診断のつきやすい下肢骨について，骨シンチの特徴，部位別頻度を検討した。

方法：^{99m}Tc化合物（Pyro, EHDP, MDP）を10～18 mCi使用した。静注3～5時間後，全身スキャナー（JSS-351, BSW-ⅡB-520）にてスキャンし，必要に応じてシンチカメラ（GCA-102, GCA-401）を用い局所の撮影を行った。

対象：昭和51年1月より，53年12月までの3年間に検査した悪性腫瘍患者800人1132回の骨シンチを検討対象とした。骨転移の診断は，X線像，理学所見，経過観察等を総合して行った。良性の骨病変は，理学所見，既往歴を参考にX線像を主体に診断した。

結果：股関節より遠位を下肢骨とし，大腿骨上・中・下，膝関節，脛骨，足関節，足の骨，に分けて検討した。骨転移は800人中29症例に見い出され，大腿骨上，大腿骨中，への転移が最も多く28症例にみられた。脛骨より遠位の骨への転移は少なかった。原発部位別では，乳癌，肺癌が多かった。

良性の骨病変は44症例5.5％にみられた。膝関節に最も多くみられ，それらは，変形性膝関節症(OA)12例リウマチ様関節炎(RA)10例，骨壊死(ON)2例，関節内骨折3例であった。OAは男性に多く膝関節内側に限局した集積を示す場合が多く，RAでは関節全体の集積増加がみられ，膝関節だけでなく足関節，指関節に多く集積する像がみられた。関節内骨折では脛骨上端に限局した強い集積像がみられた。

考察：四肢骨への転移は一般に少ないといわれており，我々の結果でも全体の3.5％であった。特に脛骨より遠位の骨には少なかった。これに反し良性の骨病変は膝関節に多く，その頻度は転移より多く5.5％であった。下肢骨の転移は少ないが，骨転移の特徴とともに良性の骨病変についての骨シンチの特徴も把握する必要があると考えられた。

Presented by Medical*Online